

## 実践報告

### 集団宿泊活動に対する保護者の期待に関する調査研究

#### Research on parents' and guardians' expectations on group activities with overnight stay

藤江 龍 FUJIE Ryo  
国立三瓶青少年交流の家

#### キーワード

体験活動、集団宿泊活動、保護者、期待

#### 要旨

本研究の目的は、集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票を開発し、開発した調査票を用いて集団宿泊活動に対する保護者の期待特性について検討することである。研究Ⅰにおいて、小学生の子どもをもつ保護者600名（男性223名、女性377名）を対象に調査を行った。因子分析の結果、集団宿泊活動に対する保護者の期待に関する5つの因子（自立、規律・集団生活、ふるまい・態度、基本的生活習慣、自然理解）が抽出された。研究Ⅱにおいては、保護者525名（男性193名、女性332名）を対象に、集団宿泊活動に対する保護者の期待について2要因（性・年代）の分散分析を行った。その結果、全ての因子で性において有意な主効果が認められた。また、自立、規律・集団生活およびふるまい・態度で年代において有意な主効果が認められた。このことから、集団宿泊活動に対する保護者の期待には性や年代によって大きくその特性が異なる可能性が示唆された。

#### I. 緒言

平成20年3月に公示された学習指導要領<sup>(1)</sup>では、「体験活動の充実」が提示され、子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むため、その発達段階に応じて、小学校では集団宿泊活動を重点的に推進することとしている。体験活動の定義については、平成19年の中央教育審議会答申<sup>(2)</sup>において、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験するものに対して意図的・計画的に提供される体験」とされており、学校教育における集団宿泊活動がこれにあたる。また平成20年7月に策定された教育振興基本計画<sup>(3)</sup>では、「小学校で自然体験・集団宿泊体験を全国の児童が一定期間実施できるように目指す」と明示されており、その必要性が示唆されている。

こういった流れの中、全国の学校では様々な形態で集団宿泊活動を実施しているが、代表的な実施場所として青少年教育施設がある。青少年教育施設とは、青少年を対象に研修事業や体

験活動プログラムの提供を行うとともに、青少年団体等の利用に供するために設置される社会教育施設である。社会教育調査<sup>(4)</sup>によると平成14年に746施設あった国公立の青少年教育施設は平成17年で719施設、平成20年で544施設、平成23年で471施設と9年間で275施設が減少している。この他に近年では学校や学校近隣の公民館等を活用して実施する学校も増えてきている。

また、集団宿泊活動を実施することで参加者の子どもたちには「生きる力」や「豊かな人間性」が身に付くなど、その有用性・有効性は多方面で報告されている。国立青少年教育振興機構<sup>(5)</sup>は体験活動の教育効果を測定する指標として「IKR評定用紙（簡易版）」を開発した。「IKR評定用紙（簡易版）」は「生きる力」を測定するもので、「心理的社会的能力」、「徳育的能力」および「身体的能力」の3つの下位能力であらわされる。「前むきに、物事を考えられる」など28項目で子どもたちの成長を簡易に評価で

きるものとして広く活用されている。子どもを日常生活とは異なる環境に送り出す保護者の理解を求めていく点でも事業評価を明らかにし、開示していくことが求められると考える。

学校教育の一環として実施されている集団宿泊活動だが、参加者である子どもたちを送り出す保護者に焦点を当てると、先行研究として矢野ら<sup>6)</sup>の研究はあるものの、近年になってやっと保護者や住民への注目がなされつつある段階であり、実証的研究データの蓄積はほとんどみられない。林ら<sup>7)</sup>は保護者の家庭教育、学校教育、社会教育に対する意識の比較を行っている。ここでは、子どもの行動特性を26項目設定し、主に指導すべき場を「学校教育」「家庭教育」「社会教育」から選択させ、学校に対する役割期待を探ろうとしたものである。ただし、子どもの行動特性に注目しているため学校教育に含まれるべき知育の内容までには及んでいない。岩永ら<sup>8)</sup>は学校教育に対する保護者の教育期待を明らかにしており、学校教育に対する保護者の期待の内容として「社会性」「教科学力」「新学力」および「競争的学力」をあげている。さらに、多くの保護者は学校教育の許容量を考えずに過剰な内容を期待していると報告している。ここではあくまでも学校教育全般に対する教育期待特性を明らかにしているが、集団宿泊活動場面に特化して検証を試みる本研究と比較すると更に焦点を絞った検証が必要となる。

ベネッセ教育研究開発センターと朝日新聞社による共同研究<sup>9)</sup>では学校教育に対する保護者の意識を調査している。ここでは経年比較がされており、小学生の保護者において、特に社会性や道徳性、規則正しい生活習慣の獲得などの期待が高まってきている。

平成25年の中央教育審議会答申<sup>10)</sup>において、「保護者に対しては、子どもの発達段階に応じて実施することが望ましい体験活動とその効果を示しつつ積極的に情報発信することにより、体験活動への理解を広げられる」とあるように、子どもたちを送り出す保護者の理解を求めていくことも重要な課題である。

子どもたちにとって保護者と離れて教員や仲間と寝食を共にする活動は非日常的なものであり、集団宿泊活動に対する保護者の期待も様々である。保護者の教育期待については、以上述べてきたようないくつかの調査研究はあるものの、集団宿泊活動に的を絞った検討は見

当たらない。

本研究では統計的手法を用いて青少年教育施設で実施する集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票を開発し、開発した調査票の信頼性および妥当性の検証を行う。また、開発した調査票を用いて集団宿泊活動に対する保護者の期待特性について検討することを目的とする。なお、本文中で用いる「子ども」という用語は小学生を指す。

## II. 研究 I

### 1. 目的

研究 I の目的は、青少年教育施設で実施する集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票を統計手法を用いて作成することである。調査票は必要最小限の項目数で構成する。次に本調査票の信頼性および妥当性を検証する。

### 2. 方法

#### (1) 調査対象

島根県大田市にある国立三瓶青少年交流の家を利用した、小学生の子どもをもつ20代から60代の保護者600名（男性223名、女性377名）に質問紙調査を行った。調査票の回収後、記入漏れや記入ミスのある回答を除外し、最終的に552名（男性198名、女性354名；有効回答率は92.0%）の回答を分析対象とした。さらに、信頼性および妥当性の検討を行うために、4週間の間隔をあけ、100名を対象に本調査票および「IKR評定用紙（簡易版）」の再検査を行った。

#### (2) 調査期間

平成23年10月下旬から11月下旬

#### (3) 調査方法

集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票の作成に当たり、集団宿泊活動を通して子どもたちに身に付くことを期待する能力や変容について自由記述のアンケート調査を実施した。次に、自由記述の補足として、「IKR評定用紙（簡易版）」の中から、本調査票に関連する調査項目を選出した。その際に、本調査票は子どもを対象に使用するものではないため、保護者が回答することを想定して項目の表現を一部修正した。収集した項目の中から、次の3点〔①保護者に適当ではない、質問しにくい、理解されにくい項目②比較的内容が重複し

ている項目③特定の環境下で保護者が期待する項目]を考慮し、該当する項目を削除した。

その結果、最終的に集団宿泊活動に対する保護者の期待に関する60項目を設定した。各項目には「とても期待する」と「全く期待しない」を両端とした5段階評定で調査対象者に回答を求めた。

#### (4) 分析方法

集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票の因子構造は、主因子法バリマックス回転によって検討した。本調査票の信頼性は、内的整合性による信頼性指標であるクロンバックの $\alpha$ 係数および検査一再検査法を用いて算出した。妥当性は、集団宿泊活動に対する保護者の期待を表す28項目の因子構造が頑健なものかを検証するため、高い因子負荷量(.50以上)を示す23項目について再度因子分析を行った。また、「IKR評定用紙(簡易版)」を保護者が回答できる形式に変換し、回答を求めた。集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の総合得点と「IKR評定用紙(簡易版)」の総合得点との積率相関係数を求めた。

なお、本研究では、アプリケーションソフトウェアIBM SPSS 20.0を用いて統計解析を行った。

### 3. 結果および考察

#### (1) 集団宿泊活動に対する保護者の期待の因子構造

各項目の素点をその項目の得点(1-5点)として、以下の分析に用いた。各項目について平均値と標準偏差を算出した結果、7項目が偏りが大きく正規性が見いだせないため削除し、残った53項目に対して因子分析を行った。この結果、5因子28項目(因子負荷量.40以上の項目)が集団宿泊活動に対する保護者の期待に関する項目として抽出された。抽出された因子とそれに含まれる項目(因子負荷量が.40以上の項目)、固有値、全分散に対する寄与率および累積寄与率をまとめたものが表1である。

第I因子は、合計8項目が含まれ、「自分の考えを他人に伝えることができるようになる」、「自分で物事を判断できるようになる」など自主性や意見の主張などを表す項目群であり、「自立」因子と命名した。

第II因子は、合計8項目が含まれ、「集団生活のルールが身に付く」、「仲間と協力できるよ

うになる」など集団生活のルールや仲間との生活を表す項目群であり、「規律・集団生活」因子と命名した。

第III因子は、合計5項目が含まれ、「物を大切にすることができるようになる」、「男女分け隔てなく仲良くできるようになる」など周囲に対する態度を表す項目群であり、「ふるまい・態度」と命名した。

第IV因子は、合計3項目が含まれ、「早起ができるようになる」、「早寝ができるようになる」など就寝や起床、食事などの生活習慣を表す項目群であり、「基本的生活習慣」と命名した。

第V因子は、合計4項目が含まれ、「動植物との接し方がわかるようになる」、「自然に関する知識が身につく」など動植物や自然環境との関わりを表す項目群であり、「自然理解」と命名した。

因子分析の結果から、集団宿泊活動に対する保護者の代表的な期待は「自立」、「規律・集団生活」、「ふるまい・態度」、「基本的生活習慣」および「自然理解」であることが明らかになった。

#### (2) 信頼性の検討

集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の各因子の内部一貫性を検討するためにクロンバックの $\alpha$ 係数を求めた。その結果、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の各因子の $\alpha$ 係数は第I因子から順に.91、.80、.86、.86、.80と高い水準にあり、本調査票の各因子の内部一貫性が認められた。

また、4週間の間隔を開けて、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の総合得点および各因子得点について検査一再検査信頼性の検討を行った結果、総合得点の「検査一再検査」間の積率相関は、 $r=0.75$  ( $p<0.001$ ,  $n=100$ )であった。各因子得点の「検査一再検査」間の積率相関は第I因子から順に $r=0.67$ 、 $r=0.71$ 、 $r=0.67$ 、 $r=0.56$ 、 $r=0.51$ であった。

これらの結果から、本調査票は集団宿泊活動に対する保護者の期待を測る調査票としての信頼性を満足させる水準にあると考えられる。

#### (3) 妥当性の検証

因子分析の結果から抽出された集団宿泊活動に対する保護者の期待を表す28項目の因子構造が頑健なものかを検証するため、高い因子

表 1 集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の因子構造

(サンプル数=552) 質問項目	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
<b>F1 自立 (<math>\alpha=.91</math>)</b>					
34 自分の考えを他人に伝えることができるようになる	.71	.23	.30	.12	.14
35 自分で物事を判断できるようになる	.68	.22	.30	.14	.11
30 自主性が育つ	.63	.25	.26	.15	.23
29 大勢の前で話をするができるようになる	.62	.18	.19	.19	.18
27 自分に自信を持つようになる	.62	.20	.17	.15	.27
33 リーダーシップをとることができるようになる	.55	.25	.30	.15	.15
28 自分の行動に責任を持つことができるようになる	.51	.18	.23	.15	.33
32 課題を進んで解決するようになる	.49	.31	.33	.27	.17
<b>F2 規律・集団生活 (<math>\alpha=.80</math>)</b>					
3 集団生活のルールが身に付く	.13	.73	.10	.06	.14
4 仲間と協力できるようになる	.17	.73	.14	-.03	.18
6 時間を守ることができるようになる	.15	.59	.17	.25	.10
1 自分の役割に気付くことができるようになる	.22	.56	.20	.27	.05
2 人を思いやることができる	.27	.53	.20	.05	.18
17 協調性が身に付く	.37	.44	.14	.15	.28
11 自分のことは自分でできるようになる	.39	.44	.11	.23	.22
14 友人との仲が深まる	.19	.44	.11	.10	.32
<b>F3 ふるまい・態度 (<math>\alpha=.86</math>)</b>					
55 物を大切にすることができるようになる	.32	.22	.68	.14	.20
54 男女分け隔てなく仲良くできるようになる	.34	.20	.60	.12	.16
52 丁寧な言葉を使うことができるようになる	.36	.20	.56	.25	.09
60 人の話を聞くことができるようになる	.36	.14	.55	.32	.19
57 誰にでもあいさつができるようになる	.28	.27	.45	.08	.27
<b>F4 基本的な生活習慣 (<math>\alpha=.86</math>)</b>					
20 早起きができるようになる	.20	.21	.11	.81	.23
19 早寝ができるようになる	.18	.08	.19	.79	.28
23 朝食を食べる習慣が身に付く	.27	.15	.28	.56	.18
<b>F5 自然理解 (<math>\alpha=.80</math>)</b>					
13 動植物との接し方がわかるようになる	.29	.12	.19	.18	.68
15 自然に関する知識が身につく	.24	.23	.05	.21	.62
7 自然の良さに気付く	.09	.25	.18	.18	.54
21 自然環境を大切にすることができるようになる	.25	.23	.25	.25	.50
固有値	11.76	1.84	1.63	1.23	1.04
寄与率(%)	15.60	12.49	9.53	8.69	8.63
累積寄与率(%)	15.60	28.09	37.62	46.31	54.94

負荷量 (.50以上) を示す23項目について再度因子分析を行った結果、同様の5因子構造が確認されており、因子的妥当性が認められた。

また、「IKR評定用紙 (簡易版)」を保護者が回答できる形式に変換し、回答を求めた。集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の総合得点と「IKR評定用紙 (簡易版)」積率相関係数を求めることにより、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の構成概念妥当性を検証した。その結果、両尺度間に有意な積率相関係数 ( $r=0.74$ ,  $p<0.001$ ,  $n=100$ ) が認められた。このことから本調査票の構成概念妥当性が認められた。

### Ⅲ. 研究Ⅱ

#### 1. 目的

研究Ⅱの目的は、研究Ⅰで開発した調査票を用いて、集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定し、その性差および年代差を明らかにすることである。

#### 2. 方法

##### (1) 調査対象

島根県出雲市立I小学校の保護者525名 (男性193名、女性332名) に質問紙調査を行った。調査票の回収後、記入漏れや記入ミスのある回答を除外し、最終的に442名 (20代男性13名、20代女性27名、30代男性57名、30代女性106名、

40代男性49名、40代女性71名、50代男性18名、50代女性40名、60代男性22名、60代女性39名；有効回答率は84.2%）の回答を分析対象とした。

## (2) 調査期間

平成24年6月下旬

## (3) 調査尺度

### ①フェイスシート

子どもの学年・クラス・出席番号、保護者の性別・年代について記入をお願いした。

### ②集団宿泊活動に対する保護者の期待

研究Ⅱでは、集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する尺度として、著者が研究Ⅰで作成した5因子28項目から構成される集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票を用いた。

## (4) 分析方法

研究Ⅱでは、集団宿泊活動に対する保護者の期待の性差及び年代差を検討するために、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の各因子得点について、2（性；男、女）×5（年代；20代、30代、40代、50代、60代）の2要因の分散分析を行った。

なお、本研究では、アプリケーションソフトウェアIBMSPSS20.0を用いて統計解析を行った。

## 3. 結果及び考察

集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の各因子得点について、2（性；男女）×5（年代；20代、30代、40代、50代、60代）の2要因の分散分析を行った。その結果を表2に示す。「自立」因子においては、年代（ $F [4.451] = 4.17, p < .01$ ）および性（ $F [1.551] = 6.76, p < .05$ ）において有意な主効果が認められた。下位検定の結果、50代より20代、30代より60代、40代より60代、50代より60代および男性より女性の方が有意に高い「自立」得点を示した。「規律・集団生活」因子においては、年代（ $F [4.551] = 6.12$ ）および性（ $F [1.551] = 11.11, p < .0$ ）において有意な主効果が認められた。

下位検定の結果、50代より20代、50代より30代、50代より40代、50代より60代および男性より女性の方が有意に高い「規律・集団生活」得点を示した。「ふるまい・態度」因子においては、年代（ $F [4.551] = 7.38, p < .001$ ）および性（ $F [1.551] = 7.36, p < .01$ ）において有意な主効果が認められた。

下位検定の結果、30代より20代、40代より20代、50代より20代、30代より60代、40代より50代、50代より60代および男性より女性の方が有意に高い「ふるまい・態度」得点を示した。「基本的生活習慣」因子においては、性（ $F [1.551] = 10.30, p < .01$ ）において有意な主効果が認められた。

下位検定の結果、男性より女性の方が有意に

表2 性別・学年別の集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票得点の平均値および標準偏差

	20代		30代		40代		50代		60代		全体		F値			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	年代差	性差	交互作用	
N	13	27	57	106	49	71	18	40	22	39	159	283				
F1	自立	3.875 (0.683)	4.144 (0.482)	3.766 (0.670)	3.952 (0.583)	3.867 (0.516)	3.827 (0.637)	3.696 (0.721)	3.745 (0.591)	3.935 (0.609)	4.265 (0.560)	3.822 (0.623)	3.954 (0.606)	4.17**	6.76*	1.54
F2	規律・集団生活	4.331 (0.375)	4.561 (0.342)	4.275 (0.508)	4.403 (0.442)	4.262 (0.479)	4.283 (0.584)	3.989 (0.681)	4.105 (0.520)	4.218 (0.427)	4.559 (0.456)	4.235 (0.506)	4.367 (0.506)	6.12***	11.11**	1.38
F3	ふるまい・態度	4.024 (0.533)	4.309 (0.480)	3.748 (0.604)	3.953 (0.614)	3.723 (0.611)	3.768 (0.645)	3.739 (0.712)	3.784 (0.577)	3.978 (0.662)	4.239 (0.609)	3.794 (0.625)	3.957 (0.631)	7.38***	7.36**	0.76
F4	基本的生活習慣	3.647 (1.064)	3.889 (0.927)	3.705 (0.954)	3.919 (0.863)	3.710 (0.955)	3.705 (0.867)	3.377 (0.754)	3.771 (0.881)	3.568 (0.691)	4.150 (0.710)	3.645 (0.909)	3.875 (0.860)	1.23	10.30**	1.52
F5	自然理解	3.956 (0.607)	4.129 (0.644)	3.928 (0.632)	4.111 (0.557)	3.972 (0.621)	4.028 (0.647)	3.674 (0.709)	4.044 (0.638)	3.861 (0.614)	4.328 (0.569)	3.905 (0.633)	4.114 (0.607)	1.34	16.07***	1.65

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

( ) は標準偏差

高い「基本的生活習慣」得点を示した。「自然理解」因子においては、性 ( $F [1.551] = 16.07$ ,  $p < .001$ ) において有意な主効果が認められた。下位検定の結果、男性より女性の方が有意に高い「自然理解」得点を示した。全ての因子において交互作用は認められなかった。

これらの結果から、以下の諸点を読み取ることができる。第1に、ほとんどの因子において保護者の年代が上がるに従い集団宿泊活動に対する期待が低くなる傾向がある。これは若い年代の保護者ほど集団宿泊活動に参加する子どもが第一子にあたり、その分様々な点において期待が高くなっているのではないかと推察できる。しかしながら、第2に60代の保護者の集団宿泊活動に対する期待が高くなっている。これは60代で退職した保護者が時間的な余裕が発生し、子どもと接する時間が増えるに伴い、期待も高まっていると考える。第3の特徴は、全ての因子において男性よりも女性の保護者の方が集団宿泊活動に対する期待が高いということである。これは保護者の子どもと過ごす時間に父親と母親では差があることが要因であると推察できる。

#### IV. 結論

本研究の目的は、青少年教育施設で実施する集団宿泊活動に対する保護者の期待を測定する調査票の開発および集団宿泊活動に対する保護者の期待特性について検討することであった。

研究Iで開発した集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票は、5因子構造で28項目からなり、「自立」、「規律・集団生活」、「ふるまい・態度」、「基本的生活習慣」および「自然理解」を表す調査票である。また、本調査票の内部一貫性、再現性および構成概念について検討し、十分な信頼性および妥当性を有していることを明らかにした。

国立青少年教育振興機構が開発した「IKR評定用紙（簡易版）」は自然体験活動を中心とした集団宿泊活動の教育効果を測定する指標として開発されたものであるが、ここで明らかになっている「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」に対して本研究で開発した集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の5因子は概ね内容を網羅していると考えられる。また、岩永らが行った研究では、学校教育に対する保護者の教育期待として「社会性」「教科学

力」「新学力」および「競争的学力」が明らかになっている。本研究の結果と比較すると、「基本的生活習慣」および「自然理解」については本研究で独自に明らかになった内容であり、これらは学校教育全般ではなく、その中でも集団宿泊活動という特別な環境の下で期待される内容であったと考える。以上のことから、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票は小学生の子どもを持つ保護者にとってふさわしい項目内容であり、かつ少ない項目数で全体的に保護者の期待を捉えており、簡便に集団宿泊活動に対する保護者の期待を把握することのできる有用な調査票であるといえる。今後は、さらに対象を広げ、集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票の標準化を行うことが求められる。

研究IIでは、研究Iで開発した集団宿泊活動に対する保護者の期待調査票を用いて集団宿泊活動に対する保護者の期待の年代差および性差を検討した。その結果、「自立」、「規律・集団生活」、「ふるまい・態度」因子について年代に関する優位な主効果が認められた。これより20代および60代の期待が高く、40代および50代の期待が特に低いことがわかる。また、全ての因子について性に関する有意な主効果が認められた。これより男性よりも女性の方が子どもの成長に対して期待が高いことが分かる。国立女性教育会館の調査報告<sup>(11)</sup>によると、子どもと一緒に過ごす時間を両親で比較しており、父親が一日平均3.08時間に対し母親は7.57時間と長時間子どもとの時間を共有している。また、同報告によると、父母の子育て役割分担では、ほぼ全ての項目で「主に母親がする」という結果も出ている。これらの結果からも、子どもとの接触時間が長く、保護者の子育て役割分担でも多くを担っている母親の方が期待が高くなることが示唆された。

保護者の集団宿泊活動に対する期待のあり方は、当然その学校が位置している地域特性や学校規模に影響を受ける。本研究では地方都市部および地方郡部に位置している学校の子どもの大半であった点を考慮すると、今後は各地域のより多くのサンプリングを行う必要性がある。

集団宿泊活動に対する保護者の期待には性差および年代差が認められたことより、これに影響を与える要因について明らかにし、さらに検討を進めることで集団宿泊活動に対する保

護者の期待特性を明確にすることができると考えられる。

## V. 引用文献

- (1) 文部科学省、小学校学習指導要領、2008
- (2) 中央教育審議会、答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」、2007
- (3) 文部科学省、教育振興基本計画、2008
- (4) 文部科学省、平成23年度社会教育調査中間報告について、2012
- (5) 国立青少年教育振興機構、「事業プログラムの効果測定方法の開発研究」、2008
- (6) 矢野峻、「だれが教育をになうべきか：子どもと家族・学校・地域の役割」、西日本新聞社、1975
- (7) 林孝、「親たちの学力競争意識と社会階層 - 東京近郊M市におけるアンケートをもとに -」教育科学研究、1991、pp. 99-135
- (8) 岩永定「学校教育に対する保護者の教育期待に関する実証的研究 - 小・中学校の調査を通して -」鳴門教育大学学校教育実践センター紀要17、2002、pp. 45-54
- (9) Benesse教育研究開発センター、「学校教育に対する保護者の意識調査2012」、2013
- (10) 中央教育審議会、答申「今後の青少年の体験活動の推進について」、2013
- (11) 国立女性教育会館、「家庭教育に関する国際比較調査報告書」、2006